



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰 (運営委員会代表)

平成15年8月25日  
通巻33号

## 第28回定例研究会のお知らせ

日本下水道文化研究会第28回定例研究会を下記の要領で開催いたします。世界の国の水事情は国ごとに大きく違い、日本の常識は通用しません。今回は、藤女子大学小林三樹先生にエジプトでの3年にわたる経験から語っていただきます。水の少ない国ならではのお話がうかがえると期待しております。ふるって御参加いただきますようご案内申し上げます。

記

演題：「沙漠の国の上下水道」

(エジプトで3年余りを過ごして)

講師：小林 三樹氏 (藤女子大学)

講演内容：雨のない国には路面勾配も側溝もない。道はホコリだらけ。エジプトを埃及と書くわけだ。水道が整備されると、行き場のない下水で家の回りは汚水の海。小川も排水路も無いからだ。現在カイロの下水は沙漠の緑化に使われて全量が蒸発する。他国に降った雨で富み栄え、自国には雨の降らない不思議な国の水を語る。

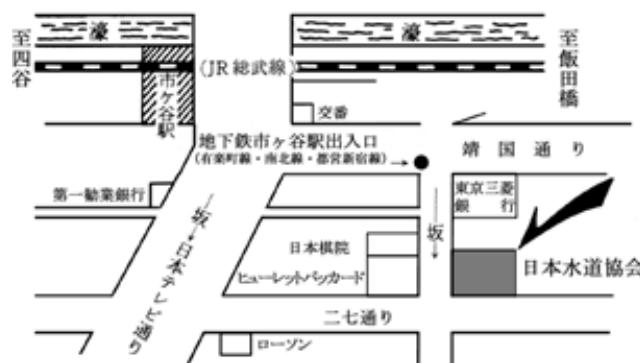
日時：9月9日(火)午後6時30分から

場所：日本水道協会会議室

〒102-0074 千代田区九段南4-8-9

JR総武線、営団地下鉄有楽町線・南北線・都営新宿線市ヶ谷駅から徒歩3分

【小林三樹教授・略歴】昭和36年北海道大学工学部・衛生工学科卒、7年間の東京都勤務の後、昭和43年北海道大学工学部・衛生工学科講師、助教授を経て、平成15年より藤女子大学大学院人間生活学研究科教授。北大在職中に3年間エジプトで上下水道事業に携わる。



## 第7回日本下水道文化研究会総会報告

甘 長准 (本会運営委員)

日本下水道文化研究会第7回総会が、去る5月17日(土)の13:30から15:30に、日本水道会館を会場として開催されました。

議事の前に、西堀代表評議員が挨拶のなかで、日本下水道文化研究会の活動に絶大なご支援またご協力をいただいた会員への謝意が表されるとともに、21世紀の循環型社会経済システムの中で、「日本下水道文化研究会」のいわゆる持続可能な発展 (sustainable development) のためには、我々が今以上に積極的にこの「下水文化」を日本の国、業界にも定着させ、本当に住み良い地球、住み良いわが国の生活環境の構築に進んでいきたいと述べられました。

続いて、運営委員会副代表木村淳弘氏が議長として選任され、総会の議事に移りました。審議された議案は以下のとおりであり、全て滞りなく承認されました。

- 第1号議案：平成14年度事業報告の承認ならびに会員の現況報告に関する件
- 第2号議案：平成14年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件
- 第3号議案：財産目録の承認に関する件
- 第4号議案：定款の改正に関する件
- 第5号議案：役員の変更に関する件

第6号議案：平成15年度事業計画及び予算に関する件 (本議案においては、関西支部の池田勝運営委員より、関西支部の動き、関西支部の事業計画について説明がなされました。)

第7号議案：総会議事録署名人の選任に関する件

\* \* \*

総会終了後の高橋裕先生の記念講演『世界の水危機とこれからの日本の役割』では、第3回世界水フォーラムで地球の水危機現状、国際河川、水道の民営化、ダムの開発などの問題に関するテーマから、水と文化、平和、宗教、ジェンダー、食料、農業、教育などの極めて多面的、多角的なテーマまで討議されたことを紹介されました。それとともに、日本人が国際的な水危機を十分に認識していない現状を指摘されました。そして、食糧自給率40%と低い水準に止まっている日本では、大量の食料品や畜産品の輸入に伴って間接的に大量の水を輸入



高橋裕先生

しているという実態について、日本人として認識しなければなりません。地球が完全に運命共同体となっている現在、日本はどうすべきかを真剣に考えるべきであり、自分達の行動が世界の水問題にどのように影響しているかを自覚しなければならないし、毎日食事をする時に外国の水をたくさん飲んでいることを忘れてはいけなと警鐘を鳴らしながら提言されました。最

後に、高橋先生はせつかくの世界水フォーラムが開かれたのに、単なるお祭り騒ぎに終わらせてはいけな。これを契機として、われわれの生活が地球とどの様な係わり合いを持っているか、とんでもないところで多くの国に迷惑を掛けていることを考えるべきだと参加者に呼掛けて講演を終えられました。

## 「水と暮らしと下水道」（関西支部総会）を開催しました

木村 淳弘（本会関西支部長）

7月20日(日)大阪NPOプラザにおいて、関西支部総会を兼ね「水と暮らしと下水道」をテーマに講演会、パネルディスカッションを開催しました。約100名の出席者がありました。

午後1時30分～4時30分の短い時間でしたが、京都産業大学勝矢教授の基調講演は非常に興味ある内容であり、また、パネルディスカッションでは、現在の下水道が抱える多くの問題について活発な意見交換が行われ、会場の市民の方からも発言があり、有意義な会となりました。出席頂いた皆さんと会の準備をしていただいた関係者にお礼申し上げます。

以下簡単に内容を紹介します。

基調講演 「水文化と上賀茂神社」

京都産業大学教授 勝矢 淳雄氏

概要 上賀茂神社と神社の境内を流れる明神川との関係を歴史的に説明し、上賀茂神社は賀茂氏が明神川の守りとして、鎮座した神社との説を紹介されました。そして、神社の川との関わり、川による行事を紹介され、現在の明神川の状況を説明されました。その中で、現在下水道が完備したが、水質は必ずしも良くなったとは言えず、分流式下水道の問題点についても述べられました。水文化、下水文化を考えさせる非常に興味ある、また有意義な講演でありました。

パネルディスカッション 「水と暮らしと下水道」

パネラー 藤木 修 国土交通省下水道部流域管理官  
(敬称略) 織田稔幸 大阪府土木副理事・下水道課長  
高柳枝直 大阪市都市環境局下水道部長  
山田弘子 NHKテレビ俳壇選者  
角田禮子 主婦連合会副会長  
勝矢淳雄 京都産業大学教授

コーディネーター 木村淳弘・関西支部長

概要 先ず各パネラーから意見の発言があり、続いてパネラー間の意見交換が行われ、会場からも発言があり、活発なパネルディスカッションとなりました。

各パネラーからは、大都市では下水道は完備したが、これから合流式下水道の改善、施設の更新など多くの問題を抱えている。また、地方では下水道の整備されていないところもあり、下水道が完備したとの市民の人達に意識と差が生じてきている。

また、大阪府の全国水の俳句大会を通して多くの下水道関係者が俳句に関心を持っていることも紹介され、住民運動を通して水問題を取り扱っている現状も説明された。

一方、水行政の一本化についても議論され、分かりやすい下水道行政、見える下水道行政が必要である。との意見があった。会場からも、市民運動の現状、俳界における活動状況、雑用水の水質問題、消化ガス発電等の発言があり、

最後にコーディネーターのまとめ閉じた。



パネルディスカッション

## 日本下水文化研究会将来構想検討会（第1回）報告

将来構想検討会という会議を7月26日開催いたしました。メンバーは、運営委員と西堀、稲場、谷口の評議員3氏です。こうした名前の会議はいろいろな事業でも組織でも流行っていますが、今回開催致しました趣旨は、本会の存在意義、その意義をいかにして社会に向けて発信していくのかを考え直してみる必要があると考えたからで

す。岐路に立っていると言えます。どういう道を選ばぬのかを考えるのに早すぎるということはないと思います。少なくとも、財政状況が厳しさを増していることは実感せざるを得ないこのごろです。

岐路に立っているという意味は、一法人としての本会が直面している課題にどう対処していくのかということ

と、NPOに求められる役割が多様化しているなかで、こういった役割を担う組織を目指していくのかということがあると思います。については、本会とかなり密接な関係をもつ下水道事業そのものが直面している課題にどのようにかかわるのかということも含まれます。については、できるだけ早急に措置しなければならないこともあると考えられますが、基本的にはとは別途の課題ではなく、安定的な運営基盤(財源・組織)と会の主要な役割を果たしていくことは、一致してこななければならないと考えます。

将来構想検討委員会の目的

この会議の目的は、とりあえず10年程度の時間タームで、目指す方向、活動目標を明らかにするとともに、当面する課題を解消するための方策を具体していこうとするものです。もちろん、これからの目標を達成するために運営体制を整えていくことも必要ですし、社会とのかかわり、すなわち社会に対しより多くの情報を発信し、社会からの評価を得ていくために何が必要かを明らかにすることも課題であると思います。そしてこれらは、下図に示しますように相互に関連していると思います。

この会議は、年度内にもう一度実施し、将来の活動目標実現への一歩を踏み出すべく、そのための実現可能な布石を提案したいと考えています。第2回の開催に向け、将来の活動内容や財源確保の方策などについて、広く会員からアイデアや意見を求めていきたいと考えていますので、その節は、ご協力のほどよろしくお願い致します。

以下では、いくつかのテーマについて、述べられた意見や議論された内容をもとに、考えていることを述べていきたいと思ひます。

会員について

会員については、どうしたら増やせるか、退会していく理由は何か、などの発言がありました。これまで、漠然と会員が増えたらいい、もっと増やしたいと半ば当然のことのように考えてきたきらいがありますが、会にとって会員とはいったい何なのかということを考えてみる必要があります。運営に携わる側にとって会員とは、活動の担い手、資金源(会費)、シンパ、活動成果を伝播する対象、イベントへの参加者などさまざまな意味をもつものです。まさに会員あってこそ成り立つ組織だといえます。一方、会員からの会組織の見方もさまざまであろうと思ひます。

会員はサービスの受け手としてだけでなく、活動の担い手であり、会員にとっては、会が活動の場、自分の考え

ていることを表明する場であることがより望ましい関係だろうと思ひます。その意味で、会員として次代を担う人々たちをターゲットにするべきであり、会員数が多いことのみが誇れることではないという意見も出ました。

最近強く感じることとして、会員の関心の対象が多様で、会員それぞれが本会に求めることに相違があるように思ひます。例えば、し尿研究会のように、会員のなかで同じ分野に深い関心を寄せる人々たちが、会のなかで活動グループを作り成果をあげています。

多様な関心を持つ人々たちが会員として集う会であることを誇りに思い、会として、幅の広さや柔軟性を保っていくことも大事なことで考えます。そして、魅力的な活動の場、意見を述べやすい機会を提供していくことは、会として努めていかなければならないことであり、将来の活動内容を考えるうえで、会員のニーズを汲取ること必要だと考えます。

また、会として、法人会員の会費は大きな財源となっていますが、その会費に報いるには、法人会員であることに誇りが持てるような会にすることが求められるという意見が出ました。この指摘は、法人会員によって支えられて行う活動が社会的にも評価に値するものであることが求められていると解釈できます。

これまでの活動の意義とその伝播

これまでの活動の成果として、とくに黎明期の下水道施設が文化財指定を受けたことは、本会の存在が大きかったという意見がありました。本会活動は、下水道・水環境分野にそれまで重視されてこなかった視点を提示してきたと思ひます。しかしながら、活動を通じて提示した視点が十分に伝播・普及されたかという点必ずしもそうとは言えないところもあります。

下水道事業に携わっている人々たちが、誰のための事業かということをおぼえてしまっていることが少なくないという指摘がありました。そういう人々の意識を新たにするために成果を伝播する努力・工夫が必要だと思ひます。会員向け、あるいは会員を対象に行ってきた広報の対象を拡大するのを感じます。

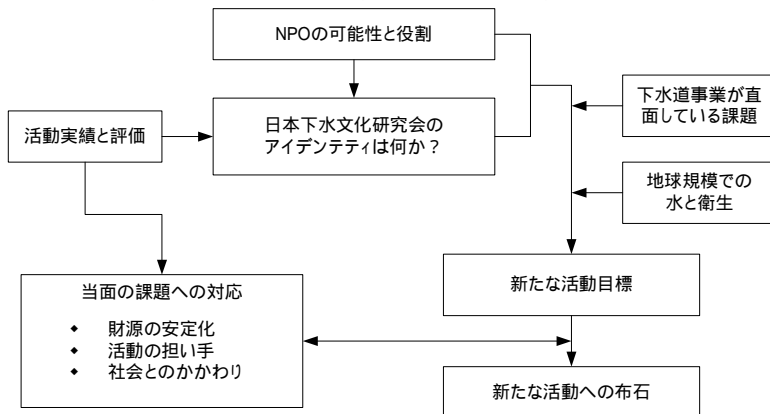
組織・活動基盤について

支部活動の充実、多様な分科会の設置などが提案されました。また、会員の関心が多様になっていることとも関連し、会員の種類も多様化させてはどうかという意見がありました。支部や分科会が活動の主体となり、多様な活動を展開するということは、多くの会員が「参加」できる場を提供することにもつながり、運営方法として目指したい方向です。

このテーマでは、財政基盤を安定化させることが当面する大きな課題です。事業や研究助成、業務受託、講座の開設などアイデアはたくさん出されました。具体的提案を行い、実現可能な実施方法を検討する必要があります。

行政との協働について

下水道事業が当面する課題として、社会の多様なセクターの協働によって事業を進めていこうという要請に応えられるのかということが



将来構想検討委員会の目的

## シリーズ・博物館めぐり（第3回）

## 名古屋市 産業技術記念館

稲村光郎（本会運営委員）

今や日本を代表するトヨタ自動車グループの博物館である。技術博物館としては、日本で唯一とまで言われる本格的な素晴らしい博物館である。ただし、自動車に関して言えば、名古屋市に隣接する長久手町のトヨタ博物館の方が、はるかにいい。こちらも必見である。

それでは何がよいのか。それは織機である。当館は、繊維機械を中心とした展示と自動車の部品と組み立て工程を主体とした二つのパートに分かれているが、何と云っても面白いのは前者である。

筆者の年代で、豊田佐吉の自動織機の名を知らない人はいないのではないかと思うほど、子供のころに聞かされたものであるが、しかしそれがどんなものか知っているだろうか。大体、何がどう自動なのかも覚えてはいまい。そもそもシャトルという言葉は知っていても、杼（ひ）が何であり、どんな構造かは判らないのではないか。

ここではそのG型自動織機を、1日に何回か動かす動態保存をしている。素朴とも見える機械が、音を立てて動いているのを見ると、感動を覚えるのは、これが世界のトヨタの原点だという思いがあるからかも知れない。佐吉が明治20年代に作った木製の織機に至っては、涙が出るような思いがする。

糸を織るという作業は古代から行なわれてきたものの、糸をどのように紡ぎ、縦糸と横糸をどう織っていくか、飛躍的發展を遂げたのが産業革命期であったことは言うまでもない。そして日本がそれをどう後追いついたか。ここではその歴史的な機械を、レプリカを含め展示している。非常に判りやすいのは、構造が単純からかも知れないが、順を追って並べている展示方法にもよると思われる。

問題は、戦後の飛躍的な技術發展が素人には判り難いということであろう。綿から糸を作る打綿～精紡工程の自動化や、杼を持たないシャトルレス織機の開発等が、戦後のエポックメイキングな技術なのだそうである。確かに水や空気で横糸を運ぶ技術の説明はまだしも、余りに

も複雑で、具体的なイメージが湧きにくいのも確かである。巨大化し、精密化している現代の技術をどう説明し、身近なイメージを掴んでもらうか、技術博物館の大きな使命であるだけに、一層の工夫が望まれる。

当博物館は、豊田紡績本社工場の建物をそのまま使った赤レンガの内外装の瀟洒な建築物である。歴史的な建物の保存は、企業にとっては難しいと思われるが、このような形で残したのも、見識であろう。また、図書室がいい。実際に技術者が使っていたと思われる豊富な技術書を、自由に閲覧できるようになっている。筆者は門外漢なので、その価値は判らないが、関連する技術史を調べるのに格好なのではないだろうか。

なお、幼い子ども向けのプレイルーム（「テクノランド」）が用意されており、親が見学の間、こちらで遊ばせておくことが出来るようである。日本の博物館には、勉強させるつもりなのか、躰の出来ていない子どもを連れてきて遊ばせている親が多い。このような子ども対策も、一つの方法であろう。

場所は名古屋駅から遠くない。

詳細は <http://www.tcmiit.org/outline/index.html>



G型自動織機

## 書評：トイレ考・屎尿考

- 会員20氏による珠玉編 -

本欄は「都市と廃棄物」2003年6月（環境産業新聞社）に掲載された同誌編集部による書評をご好意により転載させていただいたものです。なお、内容見本例の部分は割愛いたしました。

## 排泄文化の変遷を追って

出版元の技報堂は各種の自然科学、土木建築工学書などで定評ある一方、最近では「はなしシリーズ」としてB5判、平均200頁前後の一般向け入門書の書籍に熱を入れてきている所。例えば、水のはなし、水道水とにおいのはなし、環境バイオ、ビール、きき酒、ダム...といった各テーマも。今回は、「トイレとし尿」を主題に企画されたものであり、作品の内容とその批評を以下紹介する。

古来、人間が生存する上で摂取と排泄は宿命であり、文明の進展とともにとくに集団社会にあって後者の合理化（処理法）は必然だった。臭（くさ）いものには蓋をしがちなが避けては通れないところから、やがてはある種の文化的域に取り込めざる得なかった。

つまり、頭は美食文化、尾は処分（廃棄）文化?にある種の到達点を求めたと規定してもよからう。これまでも糞尿処理に関する様々な文献・書物が流布され、歴史的に検証さ



れたりも。当時の貴族は、武家は、庶民は...と階級ごとに区分されたり、江戸文化を主に落語・川柳・読本類での時代描写を民俗学的側面でピックアップされたりも。

近年、明治期以降は農村還元と並んで欧米に倣った近代下水道とそれに伴う水洗化普及段階を迎えるわけで、ここでトイレ(便器)を住宅や建物もしくは公共施設との連結において生活文化の一翼を担うまでに至った。

#### 古代・近世・近代に垣間見つつ

前述のように、し尿、下水、厠、便所などをテーマにした著作類は既に数多く発刊されていて、今回はNPO会員有志約20名でまとめられたもの。その中心的役割を果たしたのは地田修一氏(元東京都下水道局、現日立製作所顧問)。執筆陣の顔ぶれの中には鈴木和雄、山崎達雄、栗田彰、石井明男、河村清史、田中宏明ら国・自治体出身者、日本トイレ協会会員の森田英樹、TOTO出身の平田純一、考古学者の山中章の諸氏も。

講話(聞き取り)先としての工藤庄八、高杉喜平の2氏は元公務員(川崎市)、収集業者としての貢献度が高い。上記会員による30項目別にわたる論文・レポートの集大成で、レポートリーも多岐にわたっている。戦後間もない頃からの汲み取り業一代記、戦中の貨車輸送や海洋投棄の回顧録、古代・近世を含めた近江、京都、大阪、仙台、東京など各地の処事情、江戸川柳・落語・絵画に現れる便所(トイレ)の有様、現在のメタン発酵方式や環境ホルモン問題までも。

後半部分では、水洗便器の発達史と世界各地のトイレ事情と処理の実態報告などは興味を呼ぶところだ。そして昭和35年に制作されたドキュメンタリー映画「し尿のゆくえ」を誌上上映(ナレーターは宮田輝・元NHKアナ)にてエピローグを飾っている。

以上、同書のあらましを紹介した上で、学識経験者による一刀両断、辛口調の読書感想と批評を更に仰いでみたので付加する。

(3ページより) あると思います。この課題にNPOとしてどう対応するのかということも、これから本会が取り組んでいく活動と関連することだと考えます。

協働ということばも最近多用されます。行政側からは「NPOをどう使っていいかわからない」などと言う人もいます。行政が主でNPOが行政の意のもとで動かされることは、たとえ合意のもとであっても協働とは呼べないと思います。協働の関係を築くための原則として、相互理解、対等の関係、相互の自立性(NPOにとっての主体性)、関係の公開性があると思います。残念ながら、相手となる行政側がこれを理解していないことが少なくありません。

本会の提唱で始まり、継続している下水道博物館情報交流会議も協働の活動だと思います。会議の意義も認めていただいているのですが、この原則に則っているかについては吟味が必要と考えています。行政とのパートナーシップをどういったことで築くかについては、柔軟に考えたいと思いますが、先の原則のもとで行うべきだと考えます。

#### 海外技術協力について

今年の研究発表会の趣旨(前号)でも述べましたが、途

理屈抜きに気楽に読めた

この本を尻尾から読んで、私自身の昔の事を思い出、懐かしく思った。何故尻尾から読むかと言えば、大抵の本は、本を作る人の根気が切れて、文章が次第に雑になるからで、著者達の真摯な気合いが分かるからである。

真面目な事柄を組織的に書いた教科書は、勿論最初から読まねばならないとしても、尻尾の部分を覗いて見ることも良いことです。推理小説など、最後の数ページを読めば、誰が犯人か知れるから、忙しいときや店頭での立ち読みには便利な方法である。それでも、頭から読みたくなる小説というのは、大変な名作ということになる。

この本の最初の方にある、元川崎市助役・工藤庄八さんのお話は大変面白かった。日本の清掃行政を変えたのはGHQだったみたいで、黒船が来なければ現在の清掃行政は無かったかも知れない。資源循環型社会について、「そんな大層なことは言えません」と工藤さんは答えておられる。

×

×

幼稚園からずっと学校の中に居て、役人が大学教授をやったり、一生を虚業に費やした人間は、得てして理念が社会を作るべきだと考える傾向がある。足で歩く代わりに、逆立ちして、頭で歩くようになる。下らない浄水プロセスの一部分を研究したと称して一生を終わったのが、当節は都市の代謝組織を作るべきだと声高に叫び、生物化学処理と膜処理の導入を処方箋とするなどは、その時代錯誤振りに驚かされる。幸いにも本書には、そんな大時代な論説・要素がなくて、ごく気楽に読める点がいい。

文字とそれを書く紙を、昔から日本人は神聖だと思っていた。だから、不浄を文字にする事を忌んでいた。落語、川柳は下世話なもので、庶民の溜飲を下げる役をし、上等なものではないと。

不浄なものを取り扱って生業としても、それを見る立場は冷静、客観的で究極的には市民の福祉に寄与する。私自身も微力ながら同じ気持ちで生涯を過ごしてきたつもりでいる。(S.K.)

上国の水と衛生の確保にわが国の上下水道関係者が、何らかの貢献をすることが期待されています。

貢献の形態は寄付をはじめ、シルバー専門家の後方支援などさまざま考えられます。そんななかで、やや唐突かもしれませんが、本会としてJICA草の根技術協力事業に参加することについて検討を始めました。今年の研発では、そのキックオフと位置づけたいと考えています。採択に至るためにはハードルも少なくないと思いますが、多くの会員が生命を衛るという意味の「衛生」を真摯に考えておられると思います。魅力ある活動の場、これまでの経験を活かせる場を形成できる可能性が大きいと考えています。

#### おわりに

おおむね10年先を見通した将来構想なのですから、次代を担う人たちが会員として参加し、そういう人たちによる活動の層を厚くすることが必要であるという指摘がありました。まさにその通りで、次代を担う会員層が非常に薄いままで、10年先を語る矛盾を感じます。組織であれば、世代交代が肝心です。その意味でも新たな会員の開拓につながる活動目標を考えていきたいと思っています。(文責 酒井彰)

## 第21回し尿研究会例会を聴いて

森田幸子(し尿研究会会員)

私自身、下水道のこともトイレのことも、はたまた尿尿のことも、日々お世話になっているものでありながら、全くよく存じ上げない分野でしたが、夫が下水文化研究会に所属しているご縁で、こちらのし尿研究会定例会にも時々参加させていただいております。皆様どの方も下水道やトイレの分野に詳しく熱心な方々ばかりの中ではありませんが、毎回、私のようなずぶの素人にも親しみやすく興味深いお話を、下水道やトイレの様々な観点からして下さいます。

今回は平成15年6月13日午後6時半、飯田橋の東京ボランティアセンターに於いて、小松建司氏が「トイレの神様」と題して講演されました。日本には様々な神様がいらっしゃるようですが、「トイレの神様」とは、と驚きをもって拝聴いたしますと、レジメの中には、小松氏自ら足を使って集められた写真がカラーで収録されていました。一つは東京都大田区にある東光寺。もう一つは静岡県天城湯ヶ島町の明德寺。明德寺については御札も紹介されました。御札は二枚あり、一枚は文字のみのもの、もう一枚は

神様のお姿が描かれたもの。御札の入っている御札袋には、御札のおまじりの仕方が、貼る位置、高さ、心構えに至るまで、丁寧に細かく示されていました。

レジメの中では、日本の神様も引用されていました。新しい家に宿ると言われる七人の神様が、順番に家に到着し、居場所を選んでいきます。金銀財宝がたっぷり入った、一番大きな袋を背負った神様が、最後に到着し、最後までどの神様にも居場所として選ばれずに残されていた「トイレ」を居場所に決め、「トイレの神様」となるという話です。昔から、「残りものには福がある」といいますが、「トイレ」が名案の浮かぶ場所として知られていることなども思いあたり、「トイレ」に隠された神秘をも感じずにはいられませんでした。

あたり前のように毎日お世話になっている「トイレ」に改めて新しい光が差し込んで、日々の暮らしまでも再活性化されたような、あたたかい講演でした。

## 運営委員会・事務局より

8月2日バルトン忌が開催されました。この催しには必ず参加される会員(非会員の方も多数参加されますが)がおられ、「是非毎年続けてほしい」という声も聞かれます。多くの参加者を集めたり、企画を練ったりする以前に続けることに意義のある催しになってきているようです。今回の報告は、参加された会員に執筆をお願いしております。次回の掲載です。ご期待ください。なお、当日の様子をビデオに撮って下さった参加者がおられます。ご希望の方がいらっしゃいましたら事務局までどうぞ。

今回より、ふくりゅう発行をe-mailによるお知らせ、またはPDFファイルのe-mail添付でお届けしています。メールアドレスを通知いただいている方には、8月はじめにお尋ねしましたが、郵送によらなくても良い会員の方は是非メールアドレスをお知らせください。第29回定例研究会は、10月31日(金)に行います。日本環境整備教育センター・佐々木裕信氏をお迎えし、「浄化槽法制定の経緯と現状」と題して講演していただく予定です。詳しくは次号でご案内いたします。

前号でお知らせしましたが、次回のし尿研究会例会は9月5日(金)東京ボランティアセンターで行います。将来構想検討会の報告のなかで述べておりますが、会の今後に向けて会員の皆様からご意見・アイデアを募りたいと思います。とくに次の点に関してお願いしたいと思います。

財源の確保、収益事業、市民・行政との協働、草の根協力事業への参画

前号で発足をお知らせした「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」が主催するイベントとして、11月21日(金)6時から京都東本願寺において、シンポジウム「命と自然のこれから - 東本願寺が市民とともにできること - 」(仮称)を開催することが決まりました。詳しくは次号でお知らせいたします。

編集後記 ▶小林三樹先生から、「さばく」は水が少ない「沙漠」と書かなければいけないと指摘されました。水が豊かどうかが根本にあるのだと納得しました。▶水が多すぎて洪水に悩まされている国、少なすぎる国、そして雨期と乾期で洪水と干ばつの被害を経験する国。その点でわが国は非常に恵まれていると感じます。▶高橋先生の講演では、その日本が食糧や畜産物の輸入に伴って間接的に大量の水を輸入しているとの指摘がありました。日本人は世界の水危機の認識が足りない。▶本会には優れた技術や貴重な経験、また、経験に培われた知恵をお持ちの会員も少なくないと思います。そうした知恵を国を越えて活かす機会をつくることもNPOに求められることではないかと考えています。(酒井 彰)



バルトン忌2002  
江戸東京博物館十二階前で

特定非営利活動法人  
日本下水文化研究会  
〒162-0067 新宿区富久町6-5  
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129  
jade@jca.apc.org  
aan63630@syd.odn.ne.jp

## ふくりゅう 通巻33号目次

定例研究会案内 第7回総会報告	1
「水と暮らしと下水道」(関西支部総会)を開催しました 将来構想検討会(第1回)報告	2
シリーズ博物館めぐり(第3回)・名古屋市産業技術記念館 書評:トイレ考、尿尿考	4
第21回し尿研究会例会を聴いて	6

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。  
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>